

女川原子力発電所第2号機 工事計画審査資料	
資料番号	02-補-E-19-0600-40-11_改0
提出年月日	2021年3月12日

補足-600-40-11 配管解析における重心位置スペクトル法の適用について

1. 概要

配管のスペクトルモーダル解析において、配管モデルの重心位置の床応答スペクトルを単一入力で用いる手法（以下「重心位置スペクトル法」という。）は、PCV 内のような空間に配置された配管については従来から適用しており、今回の管の耐震性についての計算書の配管解析についても適用している。以下にその手法の妥当性を示す。

2. 重心位置スペクトル法について

配管系は、同じ建屋内の複数階、あるいは異なる建屋の間に渡って設置されることが多く、各支持点では異なった地震入力を受けるため、複数の床応答スペクトルを入力に用いる多入力解析法を適用することにより実現象に近い結果が算出される。しかしながら、実設計においては設計合理性等の観点より、床応答スペクトルの単一入力による解析を実施している。重心位置スペクトル法では、配管モデルの重心位置を求め、その重心位置レベルの上階の床応答スペクトルを単一入力で適用することを原則としている。

3. 重心位置スペクトル法を適用する妥当性

上記重心位置スペクトル法を適用することの妥当性を示すものとして、J E A Gでの記載及び（財）原子力工学試験センターにおける検討を示す。

(1) J E A G 4 6 0 1-1987⁽¹⁾の記載

J E A G 4 6 0 1-1987には以下の記載があり、重心位置スペクトル法が適用できると判断される。

「設計用床応答スペクトルは、当該系の重心位置に近い或いは耐震支持点の最も多い床のもの等最も適切な床のものを採用することを基本とするが、耐震安全性評価上必要ある場合は関連する床応答スペクトルによる多入力解析又はそれと同等の近似解析法を用いることができる。」（添付-1 参照）

(2) （財）原子力工学試験センターにおける耐震設計の高度化に関する調査報告書^{(2), (3)}

参考文献に示す（財）原子力工学試験センターにおける、耐震設計の高度化に関する調査報告書にて、重心位置の床応答スペクトルを用いた耐震解析が、実現象に対して保守性を有していることが確認されている。（添付-2 参照）

4. 参考文献

- (1) 原子力発電所耐震設計技術指針 J E A G 4 6 0 1-1987（（社）日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和 62 年 8 月）
- (2) 昭和 63 年度 耐震設計の高度化に関する調査報告書 別冊 2（機器系）（（財）原子力工学試験センター 平成元年 3 月）
- (3) 平成 2 年度 耐震設計の高度化に関する調査報告書 別冊 2（機器系）（（財）原子力工学試験センター 平成 3 年 3 月）

電気技術指針
原子力編

原子力発電所耐震設計技術指針

JEAG 4601-1987

社団法人 日本電気協会
電気技術基準調査委員会

6.1.3 荷重の組合せと許容限界
荷重の組合せと許容限界についての原則を以下に示すが、**詳細は参考文献を参照のこと。**

- (1) 荷重の組合せ
 - a. 地震動によって引き起こされるおそれのある現象については、その荷重を組合せる。
 - b. 地震動によって引き起こされるおそれのない現象については、その現象の発生確率と荷重の発生確率及び地震の発生確率を考慮し、同時に発生する確率が低い場合にはその組合せを考慮するものとする。

- (2) 許容限界
 - a. A₃クラス
 - (a) 基準地震動 S₁又は動的環境による地震力と他の荷重とを組合せた場合には、原則として別性状態にあるようにする。
 - (b) 基準地震動 S₁による地震力と他の荷重とを組合せた場合には、原則として過大な変形がないようにする。

- b. Aクラス
 - 上記 a. (a)と同じ
- c. B及びCクラス
 - 動的環境による地震力と他の荷重とを組合せた場合には、原則として弾性状態にあるようにする。

6.1.4 設計用地震力
設計用地震力は、設備の耐震重要度に対応した基準地震動及び動的環境に基づき算定するものとする。

- 6.1.5 地震応答解析
 - (1) 応答解析法一般
 - 換器・配管系は、その耐震重要度に応じた動的地震力に耐えらるるよう設計するが、耐震 A₃、Aクラスは静的地震力と共に動的地震力に対しても耐えらるるよう設計する。また、Bクラスは、地震を含む支持構造物の振動と共振するおそれのあるものは、Bクラス相当の動的地震力によってその安全性を検討する。
 - 動的地震力は、地震応答解析によって算定されるが、換器・配管系の地震応答解析は、換器の設計用地震スペクトルに基づいたスペクトル解析法を採用すること**も基本とする。**

設計用地震スペクトルは、当該系の重心位置に近い、或いは耐震支持点の最も多い床の最も適切な床のものを用いることを基本とするが、耐震安全評価上必要ある

場合は関連する原応答スペクトルによる多入力解析又はそれと同等の近似解析法を用いることができる。

スペクトルメモリアル解析に当たっては、考慮すべきモードは、その新設設備が偏重し得ないモードのままでとし、その重畳法は加速度、変位、応力、支反力等の算定が必要に応じてそれぞれ Square Root of the Sum of the Squares 法 (以下「SRSS」法という。)とする。

地震環境による応答と水平動的応答の組合せは絶対値法を採用するものとする。原子炉格納容器、原子炉圧力容器、炉内構造物は、その構造体の振動、多様な耐震支持点、応答相対応答解析の重要性により原子炉建屋と連成した解析モデル又は分離したサブストラクチャー一次に類似したモデルによる時刻歴応答解析法の採用を原則とする。ただし、上記のような特殊な重要構造物でなくとも、換付点、耐震支持点の地震応答加速度的に、真位換形を入力として対象換器系の時刻歴応答解析法に基づいた動的地震力を算定することは差支えない。

耐震 A₃クラスのものは、基準地震動 S₁による解析には、S₁設計用地震応答スペクトルに基づいた換器スペクトルメモリアル解析法を用いて別性設計することは差支えないが、適切な当該系の振動を評価して、上に示したような換付点、耐震支持点からの入力による非線形時刻歴応答解析法を採用することもできる。

耐震 Bクラスのものは、その基本固有振動数から共振のおそれがあるものと判断されるものは、S₁設計用地震応答スペクトル]のスペクトルに基づいて動的解析を行い、その耐震安全性を確認するものとする。

なお、地震応答解析には、安全上支障がないことを示した上で近似法又は簡便法を用いることができる(定ビョウマス法、1次元有価数法のみによる応答解析法等)、**解析モデル**

設備類は、1次元多質点-自げせん断ビーム系、配管類は3次元多質点-自げはりせん断ビーム系、その他の設備はこれに類似したモデルを原則とする。ただし、換器設備等でのオーバーホール振動の解析が必要なもの、大型貯水タンクで水の振動の解析が必要なものでは、その特性を解析するのに十分なモデルとしなければならない。多質点系(非定数系)の代りに連続体(分布定数系)又はその組合せた系とすること、あるいは重要系によるモデルとすることは差支えない。

耐震支持構造系は、耐震設計を基本としているので通常の場合は固定点と仮定して差支えないが、相当程度の果積者積積等で、支持した換器・配管系の剛性に比較して必ずしも高い剛性を有していないもの場合は、その支持剛性を考慮するものとする。アンカー部等でもその力学特性から判断して必要であればその剛性(例えば基礎コンクリート及びアンカープレートの基礎部等)を考慮するものとする。

質点系モデルの場合の質点の位置は、系の振分算した各要素の重心とすることを基本とし、物理的に重心質量がある場合(配管系のボンプ等)はその点とする。質点の数は

昭和 63 年 度

耐震設計の高度化に関する調査報告書

別 冊 2 (機器系)

平成元年 3 月

(財)原子力工学試験センター

表5-22 最大発生応力比較

(単位: kg/mm²)

		時刻歴 多入力解析	スペクトル 多入力解析	スペクトル 単一入力(EL24.3)	スペクトル 単一入力(EL31.8)
剛 領 域 モ デ ル	2.5%	2.3	2.9	2.9	2.9
	5.0%	—	2.3	2.2	2.3
	10.0%	—	1.9	1.7	1.9
	20.0%	—	1.6	1.5	1.6
共 振 領 域 モ デ ル	2.5%	18.5	19.0	19.2	27.5
	5.0%	—	12.5	12.6	17.9
	10.0%	—	8.2	8.3	11.5
	20.0%	—	5.4	5.4	7.3
柔 領 域 モ デ ル	2.5%	12.1	12.1	13.0	17.8
	5.0%	—	8.5	9.1	11.3
	10.0%	—	5.9	6.3	7.3
	20.0%	—	4.5	5.0	6.1

重心近傍

包絡スペクトル
と同等

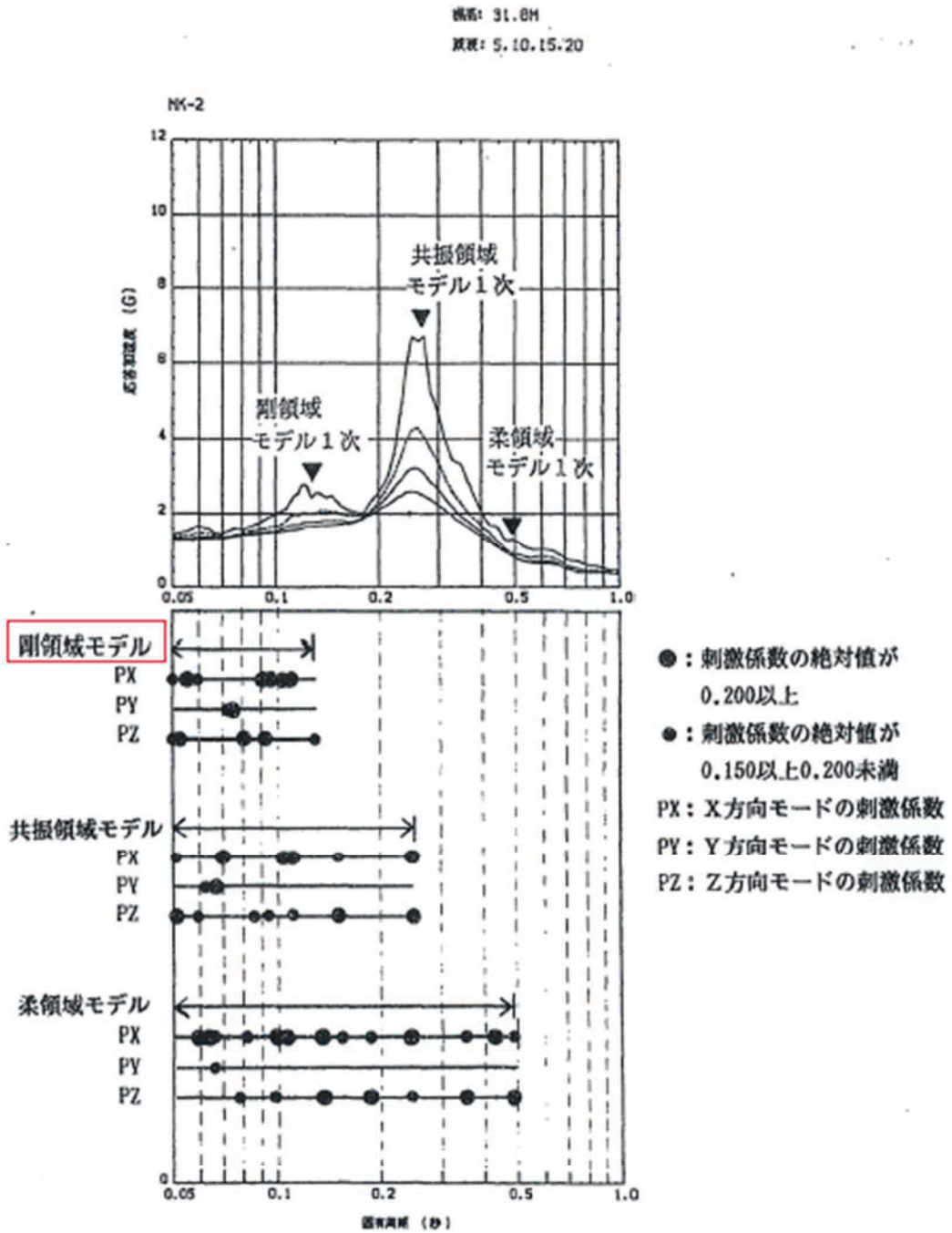


図5-46 固有値とスペクトルの関係

平成 2 年度

耐震設計の高度化に関する調査報告書

別 冊 2 (機器系)

平成 3 年 3 月

(財)原子力工学試験センター

3.2 多入力を受ける配管系について柔設計導入のための合理的な解析手法の検討

(1) 現行設計ベースにおける検討

昨年度までの各種試解析結果及び本年度実施した単純配管モデルによる検討結果より、各種解析法による応答の大小関係は以下の通りであることがわかった。

包絡応答スペクトルを用いた単一入力解析 (1.00~1.49)

V

重心位置近傍応答スペクトルを用いた単一入力解析 (1.00~1.25)

V

各支持点の応答スペクトルを用いた多入力解析 (1.0)

IV

各支持点の時刻歴波を用いた多入力解析 (0.79~1.00)

カッコ内には、本調査で実施した試解析結果に基づき、多入力スペクトルによる応答を1.0に基準化した各種解析の相対応答値を示した。